

展望 鰻とパワハラ

水辺あお

笑いのある歌が好きだ。が、必ずしも心から笑えず、一瞬とまじう歌もある。

『万葉集』巻十六に大伴家持の有名な嗤笑歌（笑いの歌）が二首ある（小学館『新編 日本古典文学全集』）。

石麻呂に我物申す夏瘦に良しといふもの
そ鰻捕り喫せ

瘦す瘦すも生けらばあらむをはたやはた
鰻を捕ると川に流るな

一首目は夏瘦せによいから鰻を食べなさい、二首目は鰻をとろうとして川に落ちるなよ、という意味だ。鰻の滋養の歌としても知られる。飢餓の人のように痩せている石麻呂（吉田老）をからかった歌で、つい笑ってしまう。

石麻呂は百濟から渡来した医師である吉田連宜の息子といわれ、連宜は家持の父の旅人とも親交があった。石麻呂は「仁敬の子（仁敬に篤い人・仁敬を人名とする説もある）」で、おもいやりがあり、家持のからかに笑顔で応じていたのかもしれない。

とはいえ、家持と石麻呂の家格の違いはあったし、立場が下の者の身体の特徴を笑いに

するのは、現代ならパワハラとなるう。

織田正吉は、日本人と笑いに関する研究を体系的に論じた第一人者であり、その著書に『日本のユーモア』詩歌篇（筑摩書房）がある。和歌における笑いや遊戯言語の歴史が具体的にまとめられていて、新鮮である。

たとえば『万葉集』はおもに一字一音の万葉仮名で綴られたが、「馬声」で「イ」、「蜂音」で「ブ」と読ませる遊びもあった。

また『万葉集』巻一にある天武天皇の、よき人のよしとよく見てよしと言ひし吉野よく見よよき人よく見

という歌も早口ことばの遊びがある。もっとも、壬申の乱で勝利した天武天皇が吉野で皇位継承者となる皇子たちの前で詠んだという背景があり、声調も高く、意味も深い。

『古今集』の時代になると万葉仮名からひらがなへの変化のなかで、同音異議語が多く生まれ、掛詞、縁語などが増えた。言葉を隠す物名も流行った。各句の頭にたとえば「か・き・つ・ば・た」の五文字を折り込んだ折句（アクロステイック）も広まった。

こうした言語遊戯の技法はさらに磨かれて、歌の内容よりもその技法のおもしろさを楽しむようになった。この技法は韻律や物語性を重んずる現代短歌でも有効だ。しかし、こうした技法は時に理知に走り、現代的な笑いとしては古くなってしまった気もする。

高野公彦著『短歌練習帳』（本阿弥書店）の第十章「ユーモアと笑い」は、ユーモアの歌と笑いの歌の違いについてふれている。ユーモアの歌は「おかしみがあつて、品格のある歌」で、笑いの歌は「笑わせようとして作られた面白い歌で、やや上つ調子」という。

そして高野は、織田の研究をもとに、品格ある笑いの歌をウイット（人を刺す）、コミック（人を楽しませる）、ユーモア（人を救う）の三つに分類している。

確かに笑いにはさまざまな種類があり、ときに人を傷つける笑いもある。

他方、あえて人を傷つけてその効果を発揮する笑いもある。たとえば、政治上の特権などをほしいままにして、人として許されざるふるまいを重ねる人びとを詠うには、品格のない笑いが有効だ。『短歌研究』二〇二四年四月号に高野のこんな歌があった。

居酒屋でジョーク愉しむ若きこゑ おなら
プーチン、もう寝タニヤフ